

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00507

研究課題名（和文）普遍自然史についての研究

研究課題名（英文）A research on the universal- natural history

研究代表者

坂本 貴志（Sakamoto, Takashi）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：10314783

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の問い：「博物学から自然史への変貌の過程でドイツ近代の知性に特徴的であるのは、宇宙及び地球の形成の歴史を包括的な自然史として探究する一方、聖書に支えられたかつての普遍史をヴァージョンアップする形で宇宙における普遍的な歴史の可能性を構築しようとしたのではないだろうか？」に対しては、これを肯定する解が得られた。そのための論証を、キルヒャー、ゲーリケ、ライプニッツ、ヴォルフ、ゴットシェート、ハラール、カント、ヘルダー、ゲーテ - の様々なテキストをもとに行い、本研究による単著『<世界知>の劇場 - キルヒャーからゲーテまで』（ぶねうま舎、2021年）によって公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

17世紀バロック期から18世紀啓蒙主義期にかけての、ドイツ語圏およびヨーロッパの知的認識において、時間の観念が変容していたことが新しくわかった。有限から無限へトマス・クーンが示した空間におけるパラダイムの変容が、時間においても生じた、というのが本研究の発見であり、これはドイツ文学史および哲学史に書き加えられた新しい視座である。時空間についてのイメージの変容が、啓蒙主義以降の文学と哲学および自然史の展開に根本的な影響を与えたのである。また、研究成果が広く書物によって公開された点に、本研究結果の社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on question: Did German intellectual in the age of the enlightenment make effort to construct a natural history that can be universal in perspective of the infinite universe? Did they form the old universal history based on the bible into a new universal history that has an universal character in the relation to the natural history of the universe? In this time the old historia naturalis was also converting into the modern natural history. The positive answer for these questions is confirmed with a research result obtained through inquiries on the texts of Athanasius Kircher, Otto Guericke, Gottfried Wilhelm Leibniz, Christian Wolff, Johann Christoph Gottsched, Albrecht Haller, Immanuel Kant, Johann Gottfried Herder and Johann Wolfgang Goethe. This research result was published in a book: Theater of <Weltweisheit> - from Kircher to Goethe. (In Japanese by Pneumasha Co. 2021)

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：自然史 普遍史 世界知 永遠の哲学 古代神学 天文学史 キルヒャー ゲーテ

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の開始当初に背景としてあったのは、1. 「普遍史」への眼差しと、2. 「自然史」への眼差しであった。1. 「普遍史」は聖書に基づいて天地創造に始まり、樂園からの人間の追放以下、様々な族長達の生涯の年数を総計して、創造以来の地球の歴史をおおむね六千年ほどと数える。この歴史の長さで矛盾したのが古くはエジプトであり、またバロック期にはイエズス会を通して知られるようになった中国という異文明のもつ歴史の長さであった。エジプトを「普遍史」の中に取り込もうとした思想的運動には、「古代神学」ないしは「ヘルメスの伝統」と呼ばれる思想史的かつ文化史的な秘教的伝統が古典古代期以降存在する。一方で「存在の連鎖」の観念を基調とした博物学は、ニコラウス・ステノの「化石」(『プロドロムス』1669年)の発見以降、ビュフオンの『自然の諸時期』(1778年)を経て、分類的類型学としての性質から、個物の自然的な形成を解き明かすことに関心の重心を移して「自然史」へと発展的に進化する。これらふたつの歴史記述の方法を視野に入れた上での、研究課題の核心をなす学術的「問い」とは、博物学から自然史への変貌の過程でドイツ近代の知性に特徴的であるのは、宇宙及び地球の形成の歴史を包括的な自然史として探究する一方、聖書に支えられたかつての「普遍史」をヴァージョンアップする形で宇宙における普遍的な歴史の可能性を構築しようとしたのではないだろうか?—哲学的・神学的性格を持ち、そしてアナロジーによって他の天体の住民の存在を想像するような文学的なファンタジーに富んだ、普遍自然史を構築しようとしたのではないか?—というものであった。

2. 研究の目的

十八世紀ドイツにおいて「普遍自然史」という観念が生成するに到った歴史的背景と、観念そのものがもつ具体的様相、そしてその後の思想と文学に対する影響の射程を明らかにすることが本研究の目的である。ここで「普遍自然史」という観念の典拠はカントの『普遍自然史ならびに天界の理論』(1755年)であるが、これは特殊ではない、自然史としての普遍を指しており、ここには普遍史と自然史との融合のイメージが隠れている。というのも、カント以前には、自然史が持つべき普遍性の探究には、聖書に記述される大洪水が常に立ち塞がったからである。例えば、イギリスにおけるトーマス・バーネットの『地球の神聖理論』(1681-90年)とウィリアム・ウィストンの『地球の新理論』(1696年)は、自然史を普遍史と融合させるための格闘であったと見なすことができる。カントの『普遍自然史』の場合は、普遍史と全く切り離されたわけではないが、むしろ地球での人間の歴史を、他の天体の知的生命体のもつであろう歴史とを合わせて普遍的に記述しようとする態度が顕著な特徴として浮かび上がる。ここには、聖書とヘルメスの伝統に基づいた地球上での一元的な宗教の歴史をヴァージョンアップして、宇宙全体を舞台とする神意の実現を歴史の終局と見なす、宗教的視点の存在があり、これがドイツ語圏における普遍自然史構築の努力であると見て取ることができるのではないか。このドイツ的な「普遍自然史」は、カントにのみ特徴的に現れるのではなく、カントに先んじてはヨーハン・クリストフ・ゴットシェートが『全世界知の基礎』(1733-66年)において、またカントに続いてはヘルダーが『人類の歴史哲学についての考察』(1784-91年)においてそれぞれ包括的な書物を展開して行っている。ゴットシェート、カント、ヘルダーの三人が、ドイツ的な偏向をもつ「普遍自然史」を展開したのではないか、というテーゼを検証することが本研究の主眼である。

この研究テーマが持つ創造性は、従来知られてきた「ヘルメスの伝統」、「普遍史」、「世界の複数性」、そして「自然史」という、それぞれ別個に論ぜられてきた思想史的観念・概念を、「普遍

「自然史」という、ひとつの共通のプラットフォームの上に布置する可能性を探究する点にあり、この「普遍自然史」という概念によってドイツ啓蒙主義期の思想・文学研究に対して新しいパラダイムを提案する点にある。そしてこのパラダイムは、それが内包する諸概念がドイツ啓蒙主義期の文学・思想研究にのみ関係するものではないため、フランス語圏およびイギリス語圏などヨーロッパの啓蒙主義研究へと接続される学際性を持つ点に獨創性がある。

3. 研究の方法

ゴットシェート、カント、ヘルダーの「普遍自然史」を、 α : 成立前史: 「普遍史」および「自然史」それぞれの観念規定、 β : 様態: 「普遍自然史」の観念規定、 γ : 後史: 「普遍自然史」のドイツ自然哲学への影響の解明、に関して研究する。

α : 「普遍自然史」が「普遍史」と「自然史」の融合観念であることを明らかにするために、

1. バロック期の「普遍史」の代表であるアタナシウス・キルヒヤー（1601-80年）を研究して、エジプトと中国の歴史の長さを前にしたヨーロッパにおける、啓示の歴史の危機を救うために「古代神学」が援用された意味を研究する。
2. 18世紀ドイツ語圏の「普遍自然史」とは異なり、自然史と啓示宗教との整合性を保つための試みを行ったウィリアム・ウィストン（1667-1752年）を対象として研究する。
3. 「自然史」そのものの画期的発展の契機となった、ニコラウス・ステノ（1638-86年）の化石学を研究する。（地質学の科学史的研究）

β : ゴットシェート、カント、ヘルダーに共通する、非キリスト教的な神学的宇宙観を解明するために、

1. ゴットシェートにおける「普遍自然史」をその主著『全世界知の基礎』において明らかにする。ゴットシェートはウィストンの「普遍史」を、啓示の特殊性を相対化する「世界の複数性」の概念と並置するが、その様相を究明する。
2. カントの『普遍自然史ならびに天界の理論』を対象として、「普遍史」を宇宙空間に全面的に拡大するその様相を研究する。ここで取り出されるべきテーゼは、他の天体の住民と地球の住民が形成する宇宙的「共和国」の概念であり、この概念が「古代神学」的な輪廻転生の観念のアップデートされた姿であるのを根拠づける。
3. 「古代神学」を背景で支える新プラトン主義の概念「パンスペルミア（普遍的種子）」が、ヘルダーの自然哲学においては、原子論的な空間理解を背景に「スタミナ（織り糸）」という新しい概念にアレンジされ、これがヘルダーの「有機論」を支えるキーワードとして機能する様を明らかにする。

γ : 「普遍自然史」がゲーテとアレクサンダー・フォン・フンボルト、およびエルンスト・ヘッケルに与えた影響について、本研究テーマのさらなる展開可能性を求めて研究する。ゲーテとフンボルトは、「普遍自然史」の先行者たちとは異なって、あらためて天文学的関心を前面にもちだすことなく、地球に限定する形で「普遍自然史」を成立させる神的な原理の探求に取り組む。またヘッケルは、ヘルダーの議論を延長する形で、人間を中心とする有機体の形成に神的な目的を見ようとする。

4. 研究成果

本研究の問い: 「博物学から自然史への変貌の過程でドイツ近代の知性に特徴的であるのは、宇宙及び地球の形成の歴史を包括的な自然史として探究する一方、聖書に支えられたかつての普遍史をヴァージョンアップする形で宇宙における普遍的な歴史の可能性を構築しようとしたのではないだろうか?」に関して、問いの前半、「宇宙及び地球の形成の歴史を包括的な自然史

として探究する」視座は、普遍史からの決別と並行し、汎ヨーロッパ的な知的探究であったことが了解された。また問いの後半に関して、普遍史はカントとヘルダーにおいて、目的論的な歴史哲学へと変換されるが、その理論には、新しく認識されるに至った自然史との接続の意識が明確に見て取れ、その意味では「普遍史」のヴァージョンアップされたものが、彼らの宇宙論的な自然史となる、というテーゼは正しいことが明らかになった。この研究内容を本研究者による単著『<世界知>の劇場ーキルヒャーからゲーテまで』(ぶねうま舎、2021年)として以下のように公表した。キルヒャーからゲーテまでに至るドイツ語圏の博物学的な知の展開は「世界知 Weltweisheit」として捉えられ、それがピュタゴラス的な知の伝統である古代神学へと遡及する一方、また啓蒙主義期のドイツの哲学と文学とに接続されている。ヨーロッパのバロック期から啓蒙主義期にかけては、時間と空間についての観念が根本的に変容し、この変容に付随して、人間が抱く歴史観と、世界の中での人間存在の位置づけとが変更された様を、ドイツ語圏に出自をもつ思想家と文学者たちーキルヒャー、ゲーリケ、ライプニッツ、ヴォルフ、ゴットシェート、ハラー、カント、ヘルダー、ゲーテの様々なテキストをもとに跡づけた。トマス・クーンは、コペルニクスによる世界像の革命を説得的に描き出したが、本書はこれに加えて時間像の変容が科学革命の時期に世界像の変容と歩調を合わせて生起し、しかし空間のイメージの場合よりも、なお大きな困難を伴ってようやく完遂されたのを示した。カントは『純粹理性批判』の中であらゆる人間に共通の認識の枠組みとして、時間と空間とを座標軸のような、一種の純粋な物差しとして提起したが、この無限の時間と空間とが物差しとして純粋に機能するためには、それらがともに神学からは独立したものとなる必要があった、というテーゼを論証した。普遍史は、自然史をせいぜい六千年ほど見積もっていたが、これに対し、啓蒙主義期にかけては無限の時間という観念が登場した。また一方、閉ざされた、有限なる世界空間ーその中心に位置する地球の上でただ一度キリストによる贖罪がなされたーは、地動説がもたらす新しい宇宙世界像によって根本的に変容した。世界観の変容の時代に世界を統一的に眺める必要から「世界知」というものが発達し、さらにこの「世界知」を統合的に記述するための原理が、「普遍的種子 (キルヒャー)」、「真空 (ゲーリケ)」、「モナド (ライプニッツ)」、「重力 (カント)」、「有機的な力 (ヘルダー)」、「メタモルフォーゼ (ゲーテ)」として、それぞれの立場において構想された様を探究して示した。

以上の研究に引き続いて、自然史は、時空間という認識の形式によって得られる「世界知」の集積からなるとの立場から、この具体的様相を「驚異の部屋」を対象として検証し、研究成果の一部を、本研究者による単著『ドイツ文化読本』(丸善出版、2024年)の中で公表することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------|
| 1. 著者名 Takashi Sakamoto | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 Goethes 'Muetter', japanische Goettin Benzaiten und das Dreieckssymbol - Eine Untersuchung ueber die kosmische Fruchtbarkeitsgottheit im Hinblick auf 'die Mehrheit der Welten' | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 Tagungsband der <Asiatischen Germanistentagung 2016 in Seoul> | 6. 最初と最後の頁 149 - 162 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 坂本貴志 | 4. 巻 234 |
| 2. 論文標題 スランガスターンと化石 - 江戸の自然史 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 成城大學経済研究 | 6. 最初と最後の頁 37-54 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|----------------------------------------|-----------------------|
| 1. 著者名 坂本貴志 | 4. 巻 2 |
| 2. 論文標題 世界知と哲学 - トマジウスからドイツ啓蒙へ | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 未来哲学 | 6. 最初と最後の頁 178-196 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

| |
|------------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名 坂本貴志 |
| 2. 発表標題 近代における古代表象と民族意識の形成 ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダーの進化論的古代神学 - |
| 3. 学会等名 基盤研究（B）玉田敦子代表『近代国家の文化的アイデンティティ形成における古代表象の諸相』研究会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|------------------------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名 坂本貴志 |
| 2. 発表標題 共通論題 II 「《近代》の形成における古代表象の諸相」 時空間における多数性への転回 カントの「普遍自然史」について |
| 3. 学会等名 日本18 世紀学会第41 回全国大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名 Takashi Sakamoto |
| 2. 発表標題 The Tale of the Bamboo Cutter and the Orphic-Pythagorean (In Session355: Asian Identities in the Global Enlightenment 3) |
| 3. 学会等名 15th International Congress on the Enlightenment (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計3件

| | |
|---------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 坂本貴志 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 ふねうま舎 | 5. 総ページ数 332 |
| 3. 書名 世界知 の劇場 - キルヒャーからゲーテまで | |

| | |
|------------------|-----------------|
| 1. 著者名 坂本貴志 | 4. 発行年 2024年 |
| 2. 出版社 丸善出版 | 5. 総ページ数 202 |
| 3. 書名 ドイツ文化読本 | |

| | |
|----------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 坂本貴志（共著者：長尾伸一ほか） | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 丸善出版 | 5. 総ページ数 692 |
| 3. 書名 啓蒙思想の百科事典 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|